



Supported by 独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金
公益財団法人松下幸之助記念志財団

調査結果と考察

木曾町開田高原には、隔年での春の火入れと秋の草刈りによる伝統的な管理が続けられている草地があり、種の多様性が高く維持されてきました。一方で、こうした管理には労力がかかるため、火入れのみ、草刈りのみへの簡略化、さらには管理の放棄が進みつつあります。しかし、一部の場所では伝統的な管理の再導入が試みられています。

7月の調査では、これらの場所を含むより広い範囲で、草原性のチョウのコヒョウモンモドキ(種の保存法による保護対象)とその食草クガイソウの数をカウントしました。その結果、クガイソウは6つの調査地すべてで計1,321個体(図1)、コヒョウモンモドキは5つの調査地で計76個体(図2)を確認しました。両種とも昨年より多くの個体を確認できましたが、実際に増えたかどうかを判断するには継続的なモニタリングが必要です。

一方、9月の調査では、これら生きものの多様性を育ててきた伝統的な草地管理作業である草刈りと干草づくりを行いました。1日目は悪天候のため作業ができませんでしたが、博物館を見学するなど木曾馬文化に触れる機会となりました。2日目からは急な斜面に張り付いて鎌で草を刈り、刈った草を束ねて“カリタテ”を作りました。カリタテは天候不順の時でも干草を作るための簡易な方法です。刈った草の一部は木曾馬牧場に運んで引き取ってもらい、餌として馬に与える体験もできました。

このプログラムでは、市民参加型の草地再生とその再生効果を測る調査手法の確立を目指しています。一昨年度までは開花植物の種類と数を指標として調査し、伝統的管理の再導入による草地の再生効果を確認することができました。昨年度からは再生草地がコヒョウモンモドキの生息地となることを次の再生の指標として取り組んでいます。コヒョウモンモドキ

は比較的判別しやすいチョウですが、飛翔している状態での判別はやはり難しく、3日目になってやっと判別できるかどうかという状態でした。市民参加型の調査手法としては、まだまだ改善すべき点が多くあることも明らかとなりました。

一方、草刈りなど草地管理作業は体力的にきつい面もありましたが、開田高原の豊かな生物多様性が木曾馬と人との関わりのなかで育まれてきたものであることを学び、馬と草地と人との間を自ら繋いでいることを実感していただいたことで、単なる草刈りとは違う意味を感じ取っていただけたのではないかと思います。

今後の見通し

コヒョウモンモドキとクガイソウの調査手法についてはまだまだ改善の余地があることがわかりました。今後もボランティアの協力を得ながら改善を図り、簡易な市民参加型の調査手法を構築したいと考えています。

開田高原では、木曾馬とそれにまつわる文化が地域の貴重な遺産として認識されています。野の花の咲く草地の風景は地域の魅力を高める要素にもなります。そうした風景によって木曾馬の文化を可視化し、その価値を再発見できるようにすることで、地域の活性化や関係人口の増加につなげることができないかと考えています。今後もこうした木曾馬文化と草地の保全・再生を進め、地域内外の多くの人に関心をもって参加していただけるような調査内容を考えていきたいと思っています。

調査の概要

長野県木曾町開田高原は、日本在来馬のひとつである木曾馬の産地として300年以上の歴史をもっています。20世紀中葉にも700頭近い木曾馬が飼われており、馬のための採草地や放牧地として約5,000haの半自然草地が広がっていました。しかしその後、馬の飼養が衰退し、今も残る半自然草地は約5ha、約40頭の木曾馬はその大部分が「木曾馬の里」などでの保存・活用事業によって飼われています。

今も残る半自然草地の一部では、隔年での春の火入れと秋の草刈りによる伝統的な管理が続けられており、草原性の種の多様性が高いことがわかっています。またこうした草地管理の技術のほか、刈草を「ニゴ」と呼ばれる干し草積みにして冬の飼葉にする技術、葉草をはじめとしたさまざまな植物利用の知識など、木曾馬や草地にかかわる豊かな伝統的知識や文化が伝えられています。昨今、このような伝統的な草地管理と木曾馬にかかわる文化を再生し、特色のある地域づくりにつなげる活動が地域で始まりました。

このプログラムは、再生の始まった伝統的管理による半自然草地の花を調査し、地域の人との交流を通じて、農山村の地域づくりや市民参加型の草地再生と調査の手法を確立することを目的としています。またこのことが、地域の伝統文化と生物多様性との生きたつながり(生物文化多様性)を再生するためのモデルケースへとつながることを目指しています。

【調査地】 長野県木曾町
2025年7月・9月 2チーム 10名

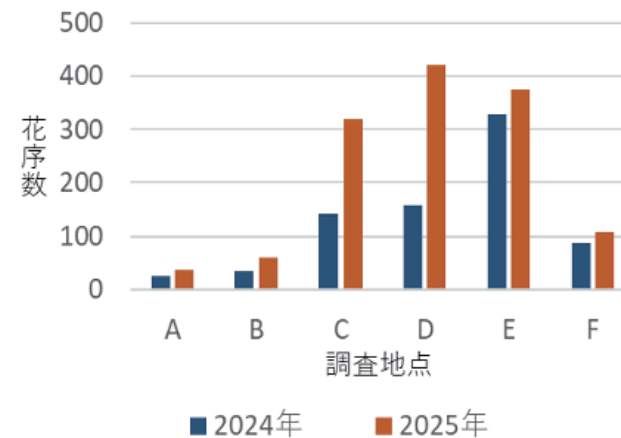


図1:クガイソウの確認数

主任研究者

須賀 丈 長野県環境保全研究所 専門研究員
畑中 健一郎 長野県環境保全研究所
自然環境部自然資源班長 主任研究員

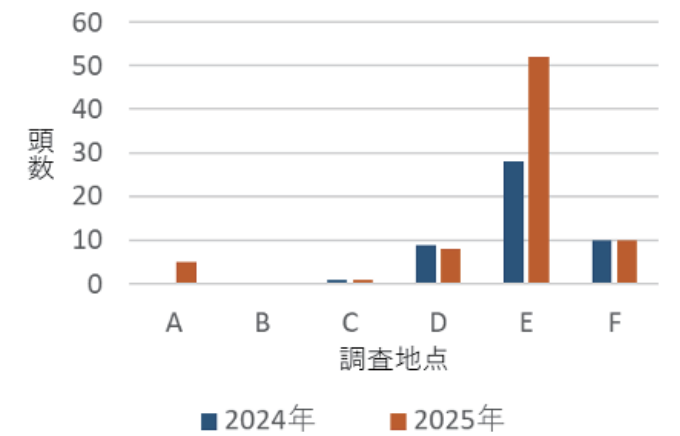


図2:コヒョウモンモドキの確認数

参加者の声

生物多様性は重要なことだと考えていたので、生物自然を守ることが動植物を守ることになり、そして循環していくという流れを実体験できました。

開田高原での昔の暮らしの話を伺って、地産地消やその場所での循環の仕組みがとてうまく回っていたことが良く分かりました。今の社会構造的に昔の暮らしに完全に戻ることは難しいけど、その知恵を使って現在に活かしていく工夫は必ず必要であると感じました。